

## 「ハッ場ダム建設事業の検証に係る検討報告書（素案）」に対する関係住民の意見聴取

平成 23 年 11 月 7 日（月）15:00～17:00

さいたま新都心合同庁舎検査棟

発言者：意見発表者 25

東京都小平市から参りました●●●●と申します。私は東京の多摩地域の一角に住まいしており、東京水道の水の消費者の 1 人です。ハッ場ダムができればその恩恵を受ける立場と言われております。地方の過疎化と東京への一極集中が両方で進み、人口が過密となった東京では、今後私たちの使用する水が足りなくなるとして、遠くの水源地に水を求めハッ場ダムはこの為のダム計画であったとのこと。私たちが使用する水を確保するために美しい渓谷の自然を壊し、そこに住まう人々の生活を壊すダム計画をこの地域の人々に押しつけてしまったことを、首都圏の住民として申し訳ない思いでいっぱいです。心優しい地域の人々は反問しながらも、首都圏の人々がそんなに困っているなら仕方ないと我慢して下さったと思います。しかし、そもそも地方に犠牲を強いて都市の人々がのうのうと水を奪って良いはずがありません。今日ようやくこの社会の持続可能性のために温暖化防止や循環型社会の形成などの環境対策が不可欠であると認識されるようになり、大量消費、使い捨ての製品の見直しなど都市に住む私たちも幾ばくかのことを学んできました。また、計画から長い年月がたって、社会情勢も変化してきました。それらを踏まえて今回の検証では、今でも、今後ダムを造らなければ間に合わないほど水が不足するのか、水需要が今以上に増えるのか、このことこそがしっかりと見直しされるべきことでした。今回の検証では、利水の開発水量は各水道事業者を確認した水需要を根拠として求めたとしていますが、利水の前提条件を正しく把握するためには利水予定者の水需給計画を厳しく審査する必要があるのではないのでしょうか。首都圏では人口の減少、節水型トイレや洗濯機など節水機器の普及などにより水道配水量は減少傾向にあります。東京都は 2003 年以来、水需要予測を行っておらず、2013 年の 1 日最大配水量予測 600 万 m<sup>3</sup> に対して実際の最大配水量は 500 万 m<sup>3</sup> をとっくに割り込むなど、水需要は減少の一途をたどっており、予測と現実の水需要は大きく乖離してしまっているのです。私たちはこれを本来の姿にただすため、昨年、東京都議会に東京の水需要予測の見直しを求める請願を提出しました。昨年 6 月議会で請願が採択されたにもかかわらず、東京都水道局はこれを無視し、水需要予測の見直しを未だに行っておりません。東京都同様、他県の利水予定者も少なくとも現状に合わせ見直し、利水計画に反映する必要があります。さらに、政策転換を進める考え方にそって見直すのであれば、今以上に節水の努力をし、現状よりも過小な水需要を条件とすることもあって良いのではないのでしょうか。節水を更に進めることや東京都の保有水源を評価し直すことで開発水量は大きく異なってきます。検証には東京都が現在くみ上げて水道水源として活用している多摩地域の地下水を保有水源に入れていないことも問題です。この水源は架空のものではなく、私たち多摩地域に住む市民が実際に毎日使っているもので、その量は日量で 40 万 m<sup>3</sup> になります。また、この過大な開発水量を条件としたため同等の水を他から持ってくるにはどうするかということになり、静岡県富士川から導水するという荒唐無稽な計画がハッ場ダムの代替案の一つとされました。大型公共事業によらない代替案を検討すべきであるのに、遠く他県からの導水案はダム案の代替案として認めることはできません。ダムに依存しない利水の代替案は過大な水需要を他に求めることではないはずで、節水を更に進めることや東京都の保有水源を正しく評価し、守り、更に地下水の涵養と保全に努めるなど、水循環の回復による水源自立を進める政策転換こそ代替案とすべきと考えます。都市の人々が水を奪うために山間の自然を壊し、人々の生活を

根こそぎ奪ってしまうことも許されないことですが、そのことを必要のない水のために行うとしたら、地域の人々の苦しみを更に過酷なものとすることになるでしょう。実際計画が持ち上がってから半世紀。ダム計画に翻弄され続けてきた現地の人々の苦しみは察するにあまりあります。いったん失われた自然、壊された生活、くじかれた希望を取り戻すことこそ多くの代償を必要とするものです。いいえ、多大なコストをかけても取り戻すことなどできないでしょう。今回の検証ではこのダム事業のこのような負の遺産性を評価の中に加えていないと言わざるをえず、このことも納得できない理由の一つです。さて、計画から事業開始、供用までに長い年月を要する大型公共事業では、その間の社会情勢の変化などにより、計画変更や廃止など柔軟な対応が必要であるとして、いわゆる時のアセスなどの必要性がこれまでも指摘されてきました。しかし、実際は、政官財の癒着の構造から、いったん決まったら見直すことができないと思われてきました。しかし、2009年の政権交代により民主党政権が無駄な公共事業の見直し、コンクリートから人へと掲げて誕生し、早速に当時の前原国土交通大臣が八ッ場ダムの見直しを表明し、今度こそ変わるかもしれない、不要なダムによって山間の自然を今以上に壊すことをとめることができるかもしれないと大いに期待を寄せました。今回の検証もできるだけダムに頼らない治水への政策転換に沿って、ダム計画が理にかなっているかを見直すことが目的であったはずですが、人口減少や水余りなど社会情勢の変化や、治水についても知見の深まり、技術の進歩などから、ダム計画の利水上、治水上、その他の効果の評価の見直しがまずされるべきであったと思います。その意味でこのダムが本当に必要なのかどうかという根本的な問いにこの検証は答えていないと思います。私たち市民は大型公共事業、いわゆるコンクリートによる効果について以前から不審を抱いており、民主党政権のコンクリートから人へというスローガンにおおいに共感したものです。さらに東日本大震災によって私たちはこれまでのコンクリートが人を守ってくれるという神話が、いかに脆いものであったかを思い知らされました。私たちは巨大開発行為によって自然をねじ伏せてエネルギーを得たり、災害を防いだりできるということは、もはや幻想に過ぎないと悟るに至りました。洪水を防いだのはダムではなく保水力を秘めた雑木の森でした。津波を防いだのは堤防ではなく、これ以上海よりも町を作ってはいけけないと言う古の経験からの教えだったのです。だいたい堤防が津波を防いでくれる、ダムが洪水を防いでくれるということを市民は信じていません。治水のためにダムが必要というダムの効果の評価は今こそ市民の納得のいく見直しがされるべきと考えます。いま、私が申し上げたことが、素人の根拠なき不信感に基づくものに過ぎないと言われるかもしれません。しかし、私たち市民が直感的に感じたのと同様、今回の検証に対し多くの学者の先生方も異を唱える声明を出されました。声明文は、検証結果について、科学性、客観性が欠如していると断じています。先に私が述べたのと同じく、利水について、水需要予測の減少傾向を無視していることもその理由の一つに挙げられております。そのほか、治水においてダムの洪水調節効果を過大評価していることや、災害に対する対策が欠如していることなどが問題ありと指摘されています。京都大学名誉教授今本先生をはじめ80人もの多くの先生が指摘するとおり、今回の検証報告書は、ダムを推進してきた国土交通省が一方に偏った考えの人達だけでまとめたものではないかとの懸念を私たち市民も感じています。是非とも国土交通省の外に第三者機関を設置し、これまでの河川行政やダム建設に批判的な専門家も加えた公開の場での検証のやり直し、すなわち、真に予断なき検証を切に求めるものです。以上、私の意見を述べさせて頂きました。ありがとうございました。

以上